

▼書評

村上宏昭著 『世代の歴史社会学』

——近代ドイツの教養・福祉・戦争——

(昭和堂、二〇一二年九月、三〇四頁、五五〇〇円＋税)

井上義和

評者は最初、タイトルを見て世代論がテーマにちがいないと本書の内容を予想した。ドイツ現代史の素人でも、ドイツが二度にわたる世界大戦（しかも敗戦）と東西冷戦による国家の分断と再統一という歴史的な断絶を、「短い二〇世紀」（ホブズボーム）のあいだに何度も経験してきた国であることは知っている。この国民的な断絶をどの年齢段階で経験するかによって世代間に断層が生まれ、「彼ら」と「我々」を対峙させる世代論が流行するであろうことは、容易に想像できるからだ。そして世代論がテーマなら言説研究によるアプローチを採用するにちがいない。社会学ではここまでは想定内である。

しかし読み始めてみると、本書の構想は評者の想定を大きく超え出るものだった。筆者が照準するのは世代論の言説ではなく、「世代とは何か」をめぐる理念的形象（世代形象）である。両者の違いは何か。世代論は「彼ら」と「我々」を遠ざけたり「我々」同士を近づけたりする親疎感情としての世代意識を前提にしている。そのような世代意識が芽生えるためには、「それに先立つて」「世代」についての一定の理念的形象があらかじめ確立していなければならない（五頁、傍点引用者）。個人的な体験や記憶も「世代」という理念上の集合的形象が存在して初めて、

世代意識の根拠として機能する」（同上）。つまり世代論を成り立たせる理念的枠組みの役割を果たしているのが、世代形象なのである。「彼ら」と「我々」を対峙させる世代論は歴史的な断絶が起こるたびに繰り返し更新されるのに対して、「世代とは何か」をめぐる理念的形象の変容はそれとは異なる速度とタイミングで進行する。

では、世代形象の動態を測定するにはどうすればよいか。その測定のために筆者が用意した道具立ては二つある。

第一に、世代形象をライフステージとコーホートという二つの側面のせめぎ合いとして把握する分析枠組である。ライフステージとしての世代は人生の段階（例えば青年期）をあらわし、世代間の違いは段階の違い（例えば中年期との違い）を意味する。一九世紀以前のヨーロッパでは五〇歳の中年期を頂上とする「人生の階段」の絵画がよく描かれていたから、世代形象としてはこちらが古い。他方コーホートとしての世代は出生年別に区分された特定集団（例えば一九八〇年生まれ）をあらわし、世代間の違いは出生年の違い（例えば一九五〇年生まれとの違い）を意味する。ゆとり世代の次はさとり世代か、などとネーミングで盛り上がる世代論を通して、コーホートは現代の私たちに馴染み深い。

理念的には両方の側面がありうるが、現実の趨勢としてはいまや後者が支配的になったとみる筆者は、幾つかの予備的な調査をふまえて、ライフステージからコーホートへという世代形象の転換が二〇世紀前半のどこかの時点で起こったはずだ——と考えた。ここで読者は「コーホートに基づく世代論は第一次世界大戦が契機になっているはずだ」と（冒頭で「予想」した評者とともに）結論を急ぎたくなるかもしれない。歴史的断絶のほとんど初めて経験という意味では半分正解だが、しかしそれは世代形象の転換を促した引き金のひとつにすぎない。

第二の道具立ては、世代形象の転換は「統計的まなざし」の浸透によって可能になった、という作業仮説である。世代形象が世代論を成り立たせる理念的な枠組みであるのに対して、「統計的まなざし」はその理念的形象にリアリティを充填する社会的な想像力に対応する。統計技術は、出生・就学・労働・結婚・疾病・死などの個人のライフイベントを大量に集積することで、集団全体の姿をあたかも一個の有機体のように浮かび上がらせる。国家の運営に不可欠の行政技術であるが、これが一般社会に浸透する前と後では決定的な違いがある。例えば、国民的規模の戦争が起こったときに、実際に前線で戦った人と銃後にいた人との間には、たしかに圧倒的な経験の差に由来する意識の断絶が生じるだろう。しかし「統計的まなざし」が浸透していない社会では、その断絶を、出生年が同じ集団（コーホート）の間の断絶として想像することができない。おそらく青年期に体験した特殊な出来事として人生の段階（ライフステージ）に回収されてしまうはずだ。

先に挙げた「コーホート」に基づく世代論は第一次世界大戦が契機になっているはずだ」という予想が半分間違いなのは、それがコーホートという理念的形象を支える社会的リアリティを前提にしているからである。「統計的まなざし」にどっぷり浸かっている私たちにはそれ以前の時代を想像することは困難であるが、ここで試みた思考実験は、本書の作業仮説に対する反証可能性を担保している。それは例えば「戦争によって生まれた意識の断絶」をどのような集団間の差異に還元するかについて異なる条件の「戦後社会」で比較検証することである。

以上述べたような二つの道具立てを近代ドイツというフィールドで用いながら、筆者は世代形象の転換が二〇世紀前半のどの時点で起こったかを絞り込んでいく。結論を先取りしていえば「ドイツにおいて世代形

象がライフステージからコーホートへと転換した瞬間は、統計的まなざしが社会に定着した一九三〇年前後に置くことができると考えられる」（二七八頁）——一九三〇年前後？ 先に（評者とともに）結論を予想したせつかちな読者は、暗黙のうちに、コーホートに基づく世代論の流行を第一次大戦終結から数年内（一九二〇年前後くらい！）に想定していたのではないか。するとこの一〇年のズレは何を意味するのか。その秘密の鍵を握るのは、世代論（言説）——世代形象（理念的枠組み）——統計的まなざし（社会的想像力）という三つの層の間のズレにある。

以下、本書の構成にそって、筆者が「その瞬間」を突き止めるまでの道のりを辿ってみよう。全体は三部構成になっている。上の三つの層を強いて当てはめてみるならば、第一部が理念の層、第二部が社会の層、第三部が言説の層にそれぞれ対応している。

「第一部 理論的省察」ではまず一九世紀から二〇世紀のドイツを舞台に展開された「世代とは何か」をめぐる理念的な議論を整理しながら、ライフステージとコーホートにつながる世代形象の萌芽的なアイデア群を抽出していく（第一章「ドイツ世代論概観」）。アイデア群の淘汰と選別のなかで、次第に「青年中心主義」という強力なパラダイムが姿を現してくる。それまで人生の階段の頂上として描かれた中年期に代わって、青年期がライフステージ上の特権的な位置を占めるようになり（いわゆる「青年期の発見」）、その青年期における歴史的な共通体験が核となってひとまとまりの世代が出来上がる、という構図だ（第二章「現代ドイツ世代論とそのアポリア——青年主義とコーホート」）。先にライフステージとコーホートを世代形象の二つの側面として操作的に取り出したが、第一部の学説史的な検討をふまえると、両者を矛盾なく接続させたのが青年中心主義だったことがわかる。

すなわち、一九世紀後半には、「多感な年頃」に同一の歴史的な出来事に刻印づけられた集団が世代を形成する、というデルタイの刻印仮説（一八七五年）が登場し、世紀転換期のドイツ青年運動を背景に浸透した青年神話と結びついて、青年中心主義のパラダイムが形成された。それを社会的に洗練させたのがカール・マンハイムの世代論（一九二八年）であり、現代の世代論もいまだにその影響下にある（そのため本書では青年中心主義のことを「マンハイム・パラダイム」とも呼ぶ）。その一方で、青年中心主義から青年色を脱色して対象を生涯全体へと押し広げる「コーホート分析」が一九六〇年代後半から台頭してくる（本書では「コーホート・パラダイム」と呼ぶ）。対立するパラダイム間で論争が起こったりもするが（第二章）、ここでは割愛する。ともかく「世代形象の転換」の裏には萌芽的なアイデア群の競合淘汰があり、それらを選び分ける「ふるい」の役割を果たしたのが青年中心主義というパラダイムだったことを確認しておこう。

「第Ⅱ部 統計的まなざしの展開」では社会的想像力の層に照準する。理念（第Ⅰ部）がいくら「転換」しても、それがそのまま言説（第Ⅲ部）に反映されるわけではない。両者を媒介するのは社会一般に浸透した認識枠組み（社会的想像力）である。したがって学者や官僚が作りだしたアイデアや技術が、知的世界に生きる教養人たちを捉え、社会的に広く受容されていく過程が重要になる。その通俗化の過程でどのような（意図せざる）変形をこうむるのかにも注意を払いたい。

統計知は、もともと国家統治に奉仕する行政技術として発展してきたという、ドイツの伝統的な教養理念からすれば「不純」で、閉鎖的な側面が強かった（第三章「教養人、この非政治的なるもの——ドイツ教養理念と第一次世界大戦」）。そうした状況を打開するべく、統計関係者の

なかから「純粋な」科学として脱皮させようという科学化の志向と、啓蒙活動を通じて社会に開放しようという大衆化の志向が生じてくる。これらの業界内在的な志向性を現実的な変化に結びつけたのが、二〇世紀初頭のドイツをめぐる「人口問題」だった。

多産多死から少産少死へという人口転換は同時代のヨーロッパ社会にさまざまなインパクトをもたらした。政策課題としての人口減少問題は「雑多な社会政策を貫通する共通言語」となり、人口科学という「既存の学問分野を横断する新たな知の枠組み」が要請され、政策と科学の相互乗り入れ（および社会工学的な知を駆使するエキスパート集団の台頭）が進んだ。そして「これらの雑多な知を束ね、一つのディシプリンとしての統一性を維持するための唯一の紐帯として、中核となる意義を担っていた」のが統計的まなざしにほかならない（二二二頁）。統計学の科学化と大衆化のあり方も、こうした社会的文脈に規定される。すなわち科学における社会工学的な知の存在感が高まることで、統計グラフも、もはや素人向けに「わかりやすく」通俗化した妥協の産物ではなく、俯瞰の全体像を「ありのままに」可視化する正統な技法として積極的に再評価されるのである（第四章「統計的まなざしの展開と変容——統計グラフをめぐる知の相克」）。ここに筆者は統計的まなざしの浸透を認める。

こうして「統計学の専門家・非専門家を問わず、一九三〇年代のドイツで突如としてグラフを多用する執筆スタイルが流行」（一六六頁）するにいたる。この傍点を付した年代が先に引用した世代形象が転換した「瞬間」と符合していることを想起しておこう。第Ⅱ部最後の第五章（「民族老化」の系譜——ヴァイマル期の人口言説と高齢者問題）では人口言説において統計的まなざしと世代論があいまって、民族消滅への不安から民族老化への危機感へと変化していく様子が観察され、第Ⅲ部へ

の格好の導入となっている。

「第三部 二〇世紀型世代形象の成立」ではいよいよ世代論言説の層に照準する。第一次世界大戦の前にはすでに、理念の層（第一部）では青年中心主義のパラダイムの形成が、社会の層（第二部）では人口問題を契機とした統計知の再評価が、それぞれ進行していた。これら二つの層の変化が合成すると何が生じるか。青年と老人というライフステージ間の対立が、いわば空間化（統計グラフ）と時間化（因果推論）を経て独特のリアリティを充填される。この傾向に拍車をかけたのが、第一次大戦を契機とした青年神話の急進化とその反面の青年層の失業問題の深刻化であり、一九三〇年代にはナチ党の活動家が「場所を空ける老いばれども！」と叫び始める（第六章「ドイツ青年神話とへ青年ならざるもの」——その変貌の軌跡）。

ここまでがライフステージとしての世代形象の臨界点である。それがコーホートへと転換をとげる最後のひと押しが、出生年と直結した前線体験の有無が男性人口を二分する総力戦の経験だった（第七章「戦争体験」をめぐる抗争と世代形象の変容——戦争文学と「銃後」の反抗）。より正確には、「前線を体験できなかった最初の世代」である戦時青少年世代が自分たちの代弁者をもつときである。彼らにとつての戦争文学とは、前線世代のレマルクの『西部戦線異状なし』（一九二九年）ではなく、グレーザーの『一九〇二年生まれ』（一九二八年）でなければならなかった。戦時青少年世代は前線体験から排除されただけでなく、前後の年齢層と比べて相対的に人口が多いために、戦後も労働市場の逼迫という矛盾が集中することになった。だとすれば、「ドイツにおいて世代形象がライフステージからコーホートへと転換した瞬間」が一九二〇年前後ではなくて一九三〇年前後だった理由も納得がいく。戦時青少年世代が、

自らの世代を言語的に表現するには一九二〇年前後は早すぎ（ほとんどが未成年）、かつ一九三〇年前後になっても世代間格差はいまだ解決していないのだ。戦後、政治的に急進化した若い彼らが中核を担った街頭暴力も、来るべき世代論言説を機能的に代替していたとさえいえる。

以上みてきたように、歴史社会学の研究書としての本書の最大の魅力は、世代形象という抽象度の高いテーマに対して、青年神話や人口転換、統計的まなざし、総力戦体験といった強力な説明変数群を惜しみなく投入して、相互の連関を実証的に分析しきった点にある。変数と史料をパランスよく操作する腕力（と胆力？）は社会学者顔負けである。最後に負け惜しみを込めたコメントを。世代形象の転換が二〇世紀に起こった普遍的な事象であるのに、それを説明するのにドイツに特殊な変数に依拠しすぎているのではないか。他の近代国民国家でも同様の転換が起こっているなら、より普遍的な変数によるシンプルな説明が可能はずだ（おそらく当該社会に関する専門知識の豊富さと説明のモデルの普遍性の間には反比例の関係が存在する）。もうひとつ、総力戦体験のような国民的断絶によらずとも、いまなおコーホート型の世代論が繰り返されるとすればなぜなのか（現代社会がお気楽な世代論を欲望する理由）。これを説明するには、やはり二〇世紀前半に特殊な変数だけではなく、平和な時代にも適用可能な普遍的な変数が必要になる。とはいえ、これはむしろ本書の成果をふまえた「世代の比較歴史社会学」「世代の現代社会学」に向けて、社会学者が引き受けるべき課題である。

（いのうえ よしかず・帝京大学准教授）